令和5年10月1日発行　春燈／第78巻第10号（毎月1回1日発行）　昭和21年7月22日第3種郵便物承認

春燈

2023 October

10月号

成瀬櫻桃子の句

林檎割るときも遠き子おもひけり

『風色』昭和四十八年

平成十二年の秋の勉強会のときのこと。宴会終了後、ロビーで休んでいると、赤電話の前に櫻桃子先生のお姿が見え。お邪魔してはと少し離れて座った。

「美菜子、元気？お父さんは今、別所温泉ってとこにいるんだよ！美菜子は今日何していたの？」と優しく語りかけていらした。そのお背中は主宰ではなく、遠き愛娘を思いやるお父様の姿であった。

平野加代子

PDF= 俳誌の salon

成瀬櫻桃子の句

落し角頭見あうて笑ひこけ

『素心』以後平成九年

櫻桃子師の作品は、抒情句あり諧謔句ありと多彩である。けれども、一貫しているのは人事を基盤にして俳句を詠む姿勢である。掲句は、擬人化された鹿がお互いに角の無い頭を見ながら笑っている句である。大らかで、素朴で、底ぬけに明るい笑いである。これは、御苦労なされた後に到達した笑いなのだろか。久々に心の底まで楽しい気分になった。

松本ゆきえ

PDF= 俳誌の salon

名誉主宰　安立公彦

熱き茶を欲る水無月の祝日や

観音の鐘声仰ぐ鬼灯市

四万六千日異人に交じる浅草寺

カーテンの白地ゆたかや夏の空

ふるさとの山路や如何に秋出水

主宰　鈴木直充

連山を浮き立たせたる青田波

半夏生ふるへてゐたる絹豆腐

一病をうべなひ扇畳みけり

塩加減よき茄子漬や人赦す

蛍の火わが前生を照らしけり

PDF= 俳誌の salon

当月集

鈴木直充選

○　古谷昌女

朝焼の補陀落へ舟漕ぎ出す（足摺岬）
風入れや寺に伝はる地獄絵図
風鈴に亡き人の句を吊るしけり
条幅の薄墨の香や半夏生
花火果て余韻を語る神谷バー

○　川端正紀

衣更へて十年先の吾を想ふ
水旨きふるさとに生き冷奴
甚平着て頼らるる身の涼しさよ
団扇手に大きな法螺を吹きにけり
ひとり碁の碁石と語る端居かな

○　中島美冬

アルパカの睫毛に似たり合歓の花
夕焼や支線の多き臨港線
水鉄砲手強し敵は三歳児
革靴を履くや素足の傾奇者
かき氷こめかみ押して笑ひ合ふ

○　有川秀一

汗拭ひ腰に予想屋嗄れ声
実習の女先生白日傘
彼の汽車の毒消売の訛かな
妹と行きしもらひ湯の径蚊喰鳥
廃校に久闊を叙す夏氷

○　立竹人

春の猫しつぽふりふり眠りをり
ほつこりと日をあげてゐる新茶かな
蟬ひとつ樹上に鳴きて日暮るるよ
妻がゐて子がゐてけふが夏休
子のためとよりわれのため兜虫

PDF= 俳誌の salon

春燈の句

鈴木直充選

神々の大和の国の落し文
夏帽子近江の旅をこころざす
角ふりて機嫌の悪しき兜虫
様々な夢ゆきすぎし籠枕
菖蒲咲く御苑の絵巻続きけり
紅一点の睡蓮に時とまりけり
ふと訪うてみたき人あり髪洗ふ
若者まぶし晩学の夏期講座
一遍上人炎暑の空へ合掌す
草いきれ歩み止むれば寺笑ふ
行儀よく並ぶ地蔵や梅雨明くる
ゴシック体の母への手紙朝ぐもり
かはをその噂を句碑にあけやすき
大南風魚影さ走る渡し跡

大阪　森田まさる
東京　橋本　雅代
神奈川　村松　鈴恵
三重　水谷　甚

本陣趾炎暑地均ししてありぬ
かはをその通ひし土手か葛を刈る
アルバムの遺影に付箋半夏生
待つ人に高く応へて白日傘
サンドレス風着るやうに首入るる
校舎より輪唱流れ二重虹
麺麭包む英字新聞鷗外忌
ピンぼけの母の写真や白日傘
扁額の文字の褪するや夏の果，
濡縁に白雲の影秋近し
長昼寝余命少々無駄遣ひ
大の字に伸びる畳に青葉風
粕漬けの魚焦がすや遠花火
諍ひて無言のうちの遠花火

埼玉　斉藤みちよ
千葉　神宮司和子
茨城　小出みずき

PDF= 俳誌の salon